

題目：地域在住高齢者の生活を構成する習慣・役割作業
ー老人クラブ会員を対象とした自由記載式調査よりー

保健医療学専攻・作業療法学分野・作業活動支援学領域
学籍番号：12S3008 氏名：岩上さやか
研究指導教員：杉原素子

キーワード：習慣・役割作業 高齢者 在宅生活 作業療法

<研究の背景と目的>

人口動態の変動や診療報酬の改定により、近年医療は「地域での生活」や「在宅復帰」に着目した動きとなっている。入院生活から在宅復帰を支援する際、患者自身が今後自身で生活してゆく意識を持つことも必要であり、病前生活の日々の習慣・役割作業を実施することで、その意識を持つ事が出来た例を筆者らは報告した¹⁾。この中で、趣味や友人内での役割等、その人ならではの作業と同時に、誰にでも存在する様な布団を上げる、食器を洗う等の日課や当番のような作業の重要性も明らかにした。Kielhofner は作業療法士が着目する役割は日々の機能や習慣の大半を構成すると述べており²⁾、これらの事からも生活に組み込まれた日々の習慣・役割作業の聴取とその実施が在宅復帰を支援する際に重要であると言える。

しかし、一般的に生きがい等生き方の転換期と言われている定年退職後³⁾の男性等からは、病前生活聴取で仕事以外の内容を聞き取ることが難しい場合がある。また、人の生活様式や価値観は個人差が大きく、聴取できる内容は対象者の性格やセラピストの力量により左右されてしまう現状がある。更に、習慣や役割に関する先行研究では内容項目を学生、父親、生産者等属性で示すものが多く詳細な活動内容が明らかにされていない。そこで本研究は在宅復帰支援の為に作業療法士が病前生活を聴取する際に幅広い視点を持ち、適確な評価を行うために1) 地域在住高齢者への調査から、自分ですべきだと思っている日々の習慣・役割作業の実態とその項目を明らかにすること 2) 評価視点とする為に、得られた習慣・役割作業の項目の特徴を明らかにすることを目的とした。

<方法>

概要：自由記載式の調査を行い得られたデータを KJ 法におけるグループ分けの手法を用いて分類し、分類された項目を統計的手法にて特徴を明確にした。

研究対象：首都圏近郊 A 市老人クラブ全 27 地区の 60～70 歳代を中心とした脳血管障害の既往の無い男女 217 名。調査方法：自由記載式の質問紙により性別や年齢等の基本情報と「毎日家でする事」「地域でよくする事」等の日々の生活についてのデータ収集を行った。質問紙は対象者所属老人クラブの会長へ説明し、各個人への配布を依頼した。調査実施期間は平成 25 年 8 月 5 日～9 月 3 日。分析方法：自由記載により得られた日々の生活に関する作業名を KJ 法におけるグループ分けの手法により 3 名の作業療法士で分類し、作業項目を明らかにした。さらにこの項目と基本情報との関係性をクロス集計にて、作業実施内容の特徴をクラスター分析及び判別分析にて明らかにした。なお記述統計並びに推測統計に関しては SPSSver21for Windows を用いた。

<倫理上の配慮> 国際医療福祉大学倫理審査委員会より承認を得た (13-Io-88)

<結果>

- 1) 有効回収数：回収数(率) 217 名(100%)
- 2) 対象の基本属性：性別(平均年齢)；男性 109 名(平均 73.8 歳) 女性 108 名(平均 72.3 歳)、配偶者；有り 83% 無し 17%、同居形態；配偶者と 41% 二世帯 14% 独居 7%、仕事；定年退職 61% 常

勤7% 非常勤3% 無職24%。全国の同世代と比し、調査対象群は仕事を既に引退し家族と暮している特徴のある群であった。

3) 習慣・役割作業の実態：毎日家で行われている作業；総数203種、内容は異なるが男性143種、女性142種であった。男性に多く見られた作業は、ゴミ出し・仏壇に水をあげる等であり、女性では洗濯・朝食作り等であった。地域や友人との関係で行われている作業の種類；総数197種、男性123種、女性103種であった。男性に多く見られた作業は、老人会役員・登下校パトロール等であり、女性は友人との集まり・老人会役員等であった。上記作業203種と197種の合計400種を日々行われている作業とし、これを筆者を含む作業療法士3名でKJ法におけるグループ分けの手法を用いて分類し、中項目81種と大項目32種を得た。

4) 作業の特徴：基本属性と実施している作業との関係では、性別・年齢・配偶者の有無・同居形態・仕事状況の間で有意差($p<0.05$)が認められる作業が存在し、男性が有意に行っている作業として戸締り・防犯活動等、女性が有意に行っている作業として食事の支度・家計管理等を得た。クラスター分析と判別分析の結果、作業実施内容に特徴のある5つのグループを抽出する事ができ、それらは家事活動を中心とする2群(生活全般の管理をする群、地域活動と家事を両立する群)と趣味等を中心とする3群(趣味等好きな事をする群、好きな事と地域貢献活動をする群、家事の一部を手伝う群)であった。

<考察>

1) 生活を構成している日々の役割・習慣作業の実態

本調査では、生活を構成している習慣・役割作業として400種の作業項目を得ることができ、例えば果物の準備や雨戸を閉める等、日々の生活にある何気ない作業を人によっては自分がすべき習慣・役割作業と捉えている事、また多種多様な作業を行う事で日々の生活が構成されている事が確認できたと考える。これらの作業内容は男女で異なり、男性は地域での作業、女性は家庭内での作業が多いという先行研究と一致した視点で、評価の焦点を絞る事が出来ると考える。また400種を分類した81中項目は、先行研究で用いられてきた習慣・役割に関する項目を網羅した上で新たな内容を加えた項目となっており、病前生活を評価する際のより具体的な手掛かりとして有用であると考えられる。

2) 分類後作業項目の特徴と活用に向けての示唆

クロス集計の結果から、人が日々行っている習慣・役割作業は性別による影響が最も大きい事、それに加えて配偶者の有無や同居の形態といった環境が影響することが確認できた。更に、年齢でみると高齢になるほど習慣・役割作業は内容が変化すること、作業実施を挙げた数でみると男性の方が少なく挙げる傾向があることが確認できた。これらの結果は病前生活評価の際に、予め把握している対象者の基本情報と照らし合わせて評価の視点を絞る事を可能にすると考える。実際の評価場面にこれらの視点を取り入れるには、調査で得られた項目を一覧とする手引きの作成等が有用であると考えられる。

<本研究の限界と課題>

本研究で多くの作業を得た背景には老人クラブ会員を対象にした点、また内容には季節や地域性の点で影響を受けた可能性がある。これらの限界に対し継続的に情報収集をした上で、臨床現場での具体的な活用方法を検討する事が、今後の本研究の課題である。

<引用文献>

- 1) 岩上さやか, 杉原素子. 患者が自身の生活に目を向けるきっかけ(回復期)パレリテーション病棟入院経験者のインタビューから. 日本保健科学学会誌 2014. 17-3: 151-158
- 2) Kielhofner, G, Burke, J.P. Components and determinants of human occupation. A Model of Human Occupation. Baltimore. Williams&Wilkins 1985:17-20
- 3) 佐藤真一. 団塊世代と退職と生きがい. 日本労働研究雑誌. No550 : 5, 2006